

鞘に収められた石剣



●コレクション・データ

時代 弥生時代 中期
調査 唐古・鍵遺跡 第13次調査
発見年 1982年
大きさ 剣…長さ16.8cm 幅3.1cm
鞘…長さ14.6cm 厚さ2.5cm
展示位置 第1室 「交流と戦い」

剣は中国で発達した武器の一つで、春秋・戦国時代から漢代には、銅剣や鉄剣が使われました。また、中国東北部や朝鮮半島でも独自の銅剣・石剣が作られ、これらを模倣して日本でも石剣が作られたとされています。

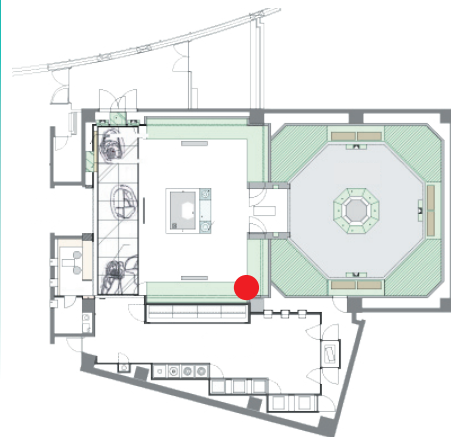
今回紹介する鞘に収められた石剣は、サヌカイト製の打製石剣で大型品に属します。この石剣をよく観察すると、剣の先端から中央の刃部は、両面から交互に小さく打ち割り鋸歯状に作り出されています。それに対し、基部から中央は刃潰しされ、中程にはサクラの樹皮が巻かれています。このことから、剣の刃と握りの部分を意識的に製作したものであることがわかります。

さらに注目されるのは、この石剣がヒノキ製の鞘に入れられていたことです。鞘は、浅いU字形に加工した白木の板材を2枚組み合わせ、両端をサクラの樹皮で縛り固定して

います。また、鞘の片面には、5mmほどの小孔が2つあけられており、紐を通し垂下していたと考えられます。この紐通孔は、斜めの位置にあり、右利きの人物が左の腰に、鞘を装着したと想定されます。

これまで打製石剣は、「石槍」と呼ばれることもあり、その位置づけは一定しませんでした。しかし、今回の資料は、全国的に例のない鞘入りで、短剣であることを証明することができるとなりました。また、鞘に収められていることにより、腰に佩用していたこともわかりました。このような打製石剣は、弥生時代中期に大型化した石鏃とともに、戦争や争いの発生を示す資料として注目されています。

こうした想定が正しければ、打製石剣は接近戦用の刺突具と位置づけられ、激しい戦闘のシーンを彷彿とさせます。



ミュージアム上面図と展示位置